

令和6年度 厚生労働科学行政推進調査事業費（障害者政策総合研究事業）
総括研究報告書

障害者総合支援法の対象範囲の検討と
障害福祉計画の作成に向けたデータ利活用の手法の確立に関する研究

研究代表者 今橋久美子 国立障害者リハビリテーションセンター研究所

研究要旨

本研究では、障害認定基準の見直しおよび障害福祉計画の作成に向けたデータ利活用の試行を進めた。特に呼吸器機能障害の認定基準の改善を検討し、難病指定医への支援法普及啓発を継続した。また、行政が行う調査データの分析により、ワシントン・グループの指標と他の設問との関係、障害種別・程度・年齢・性別との関連性を明らかにした。さらに、障害者の加齢による生活機能の変化や疾病予防、健康増進のためのデータ収集を継続した。第7期障害福祉計画については、相談支援体制の強化、地域生活支援拠点の整備、発達障害者支援、入所施設からの地域生活移行促進、福祉サービスの質向上を検討した。

最終年度は、呼吸器機能障害認定基準の最終案を作成する。また、生活のしづらさ調査の改善案を提示するとともに、障害福祉計画評価指標の妥当性を検証する。

研究分担者

清野 絵 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 室長

齋藤 崇志 国立障害者リハビリテーションセンター研究所 研究員

樋口 幸治 国立障害者リハビリテーションセンター病院 運動療法士長

澤田 泰宏 国立障害者リハビリテーションセンター病院 部長

小崎 慶介 心身障害児総合医療療育センター 所長

岩谷 力 長野保健医療大学 学長

小澤 温 筑波大学 教授

安井 秀樹 浜松医科大学医学部臨床研究センター 特任准教授

平井 豊博 一般社団法人日本呼吸器学会
呼吸器機能障害の認定基準見直しに係る

WG 長

A. 研究目的

身体障害者手帳の障害認定基準及び障害者総合支援法の対象範囲は、医学の進歩や時代の変化に応じて、より公平かつ適切なものとなるよう見直しが必要である。また、これらの法制度の対象者に、必要なサービスを適切に提供するには、データに基づく実行性の高い障害福祉計画の策定とその有効性評価が不可欠である。

そこで本研究は、1) 認定基準の見直しを要する障害及び障害者総合支援法の対象要件への適否が未決の疾病について、その判断に必要な事項を明らかにし、基礎資料を作成すること、2) 障害福祉計画の策定に必要なデータ収集と利活用手法の確立及

び評価指標を作成することを目的とする。

B. 研究方法

詳細は、下記の各分担報告書に記載のとおり。

1. 身体障害認定基準と障害者総合支援法の対象範囲の検討
2. 障害者手帳の所持状況と国連国際障害者統計ワシントン・グループの指標 (Washington group short set) で定義される「日常生活における苦勞の有無」の差異
3. 国連の国際障害統計ワシントン・グループの指標と既存質問「健康上の問題での日常生活への影響の有無」の比較
4. 令和4年全国在宅障害児・者等実態調査（生活のしづらさなどに関する調査）における調査の改善に関する意見・要望 自由記述式回答の分析
5. 令和4年「生活のしづらさなどに関する調査（厚生労働省）」における災害に関する設問の有用性と課題
6. 障害者手帳を所持する高齢者のうち介護保険サービスを利用しない者の生活機能の経年変化
7. 国連国際障害統計に関するワシントン・グループ：第24回年次会合の概要
8. 障害福祉計画の作成に向けたデータ利活用の手法の確立に関する研究
9. 障害児の疾病予防と健康増進
10. 障害者の疾病予防と健康増進

C. 研究結果

研究2年目は、呼吸器機能障害の認定基準について見直しの議論をさらに進め、現行の認定基準の問題点を抽出し、実臨床の

データを用いた調査に基づき、新たな認定基準案を検討した。また、難病指定医に対する障害者総合支援法の普及啓発を継続した。

行政データの利活用については、令和4年生活のしづらさ調査等の二次解析においては、ワシントン・グループの指標の結果および他の設問との対応関係、新設された設問と障害種別、程度、年齢、性別との関係、自由記述の詳細を明らかにした。国連障害者権利条約および国連ワシントン・グループの進捗についても動向を捕捉した。また、障害種別・等級別の健康チェックデータの比較分析を継続し、障害の有無による加齢の影響と生活機能の差異を明らかにするとともに、障害者・児の疾病予防、健康増進、保健医療福祉サービス利用に関するデータ収集を継続した。

加えて、第7期障害福祉計画での質的な要素を含む指標項目に焦点をあて、相談支援体制、地域生活支援拠点、児童発達支援センター、地域包括ケアシステム、発達障害者支援、入所施設から地域生活への移行、障害福祉サービスの質の向上のための取り組み体制などの検討を進めた。

D. 考察

1年目、2年目の結果を踏まえ、最終年度は下記を行う。

1. 障害認定基準の見直しに必要な基礎資料の最終案を作成する。
2. 生活のしづらさ調査及び障害福祉関係データを利活用例として、障害福祉計画の策定に資する基礎資料を作成する。
3. 令和4年生活のしづらさ調査等の二次解析を継続するとともに次期生活のし

- づらさ調査に向けた改善案を作成する。
4. 国連障害者権利条約および国連ワシントン・グループの進捗について整理し報告する。
 5. 障害福祉計画に係る基本指針の成果指標と活動指標の妥当性を検証し、改善点を示す。
 6. 障害者・児の疾病予防、健康増進、保健医療福祉サービス利用について効果的な実践方法を示すとともに情報発信を行う。

E. 結論

本研究では、障害認定基準の見直しと障害福祉計画作成に向けたデータ利活用を進めた。呼吸器機能障害の基準改善を検討し、難病指定医への普及啓発を継続した。また、行政データの分析により、ワシントン・グループの指標と障害種別・年齢・性別との関係を調査し、加齢の影響や健康増進のためのデータ収集を実施した。

最終年度では、認定基準の最終案作成、生活のしづらさ調査の改善案提示、障害福祉計画評価指標の検証を行い、健康増進・福祉サービス利用について情報発信を行う。

F. 研究発表

1. 論文発表

1. Oishi K, Yasui H, Inoue Y, et al. The role of arterial stiffness as assessed by the cardio-ankle vascular index in patients with chronic obstructive pulmonary disease. *Respir Med.* 2025; 241:108078.
2. Yasui H, Oishi K, Nihashi F, et al. Factors associated with uncontrol-

- led severe asthma in the biologic era. *Respir Med.* 2025; 236:107881.
3. Saito T, Imahashi K, Yamaki C: The First Use of the Washington Group Short Set in a National Survey of Japan: Characteristics of the New Disability Measure in Comparison to an Existing Disability Measure. *Int J Environ Res Public Health* 2024, 21(12). doi: 10.3390/ijerph21121643.
4. Kazuki Kitazawa, Kenji Tsuchiya, Kazuki Hirao, Tomomi Furukawa, Fusa e Tozato, Tsutomu Iwaya and Shinichi Mitsui. Escalation on Kihon Checklist Scores Preceding the Certification of Long-Term Care Need in the Older Population in Japan. A 9-Year Retrospective Study. *Health Services Research and Managerial Epidemiology.* 11(1-9); 1-9:2024.
5. Yamaguchi K, Imahashi K, Kono M, Ishiwata R. Multilayered systems for rehabilitation for older people, person with disabilities, and children with disabilities in Japan. *J Natl Inst Public Health.* 74(1), 2-14, 2025.
6. 北村弥生, 河村宏. 当事者主体の災害準備-:浦河べてるの家の津波避難訓練. *新ノーマライゼーション.* 44(494). 2024. <https://www.dinf.ne.jp/japanese/prdl/norma/n494/n494006/>
7. 市川裕美, 北村弥生. 当事者主体の災害準備-自立生活センターの自主広域避難. *新ノーマライゼーション.* 44(49

- 6). 2024.
8. 平出哲郎, 柏崇志, 北村弥生. 当事者主体の災害準備-特別支援学校高等部で防災を主体的に地域と共に学ぶ. 44 (498). 2024.
 9. 市川裕美, 北村弥生. 当事者主体の災害準備-自立生活センターの自主広域避難2. 新ノーマライゼーション. 44 (500). 2024.
 10. 市川裕美, 北村弥生. 当事者主体の災害準備-自立生活センターの自主広域避難3. 新ノーマライゼーション. 44 (502). 2024.
2. 学会発表
 1. 安井秀樹 呼吸器領域における指定難病と障害者施策について 第34回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 2024年11月16日
 2. 安井秀樹 呼吸器領域における指定難病の診断基準等のアップデートおよび新規疾病追加 第64回日本呼吸器学会学術講演会教育講演 2024年オンデマンド配信
 3. 北村弥生, 岩谷力. 障害種別による災害準備状況の比較. 日本リハビリテーション連携科学会. 2025-3-16.
 4. 北村弥生. 国民生活基礎調査で示された視覚に機能制限がある者の特性. 第32回視覚障害リハビリテーション協会研究大会. 東京. 2024-09.
 5. 北澤和美, 小澤温, 青木明子, 田中康雄, 永野叙子, 平田真基: 「障害者相談支援体制を強化する効果的なプロセスの解明」日本リハビリテーション連携科学学会 (第26回大会) (東京医療学院大学) ・2025年3月15日
 6. 小河周平, 関剛規, 中澤若菜, 望月太敦, 永野叙子, 平田真基, 小澤温. 「児童発達支援センターに期待する中核的役割:特別支援教室教諭へのアンケート調査から」日本リハビリテーション連携科学学会 (第26回大会) (東京医療学院大学) ・2025年3月15日
 7. 小崎慶介. 小児の(リ)ハビリテーション医学・医療:日本における歴史と展望. 第8回日本リハビリテーション医学会 秋季学術大会. 岡山. 2024/11/1-3.
 8. 澤田泰宏. ジョギングやウォーキングによる健康維持・増進の分子機序と、その地上における進化過程との整合性. 第47回日本分子生物学会大会. 福岡. 2024年11月
 9. 澤田泰宏. Mechanical elements are the essence of exercise contributing to organismal homeostasis. 第97回日本生化学会大会. 横浜. 2024年11月
 10. 澤田泰宏. 「Exercise is Medicine (運動は万能薬)」を支える分子基盤. 第8回日本リハビリテーション医学会 秋季学術集会. 岡山. 2024年11月
 11. 澤田泰宏. 運動による生体恒常性維持効果のメカノバイオロジー — ロコモティブシンドロームという概念の先進性と妥当性. 日本臨床バイオメカニクス第51回学術集会. 大阪. 2024年11月
 12. 澤田泰宏. Exercise-mimicking vertically oscillating head motion lowers blood pressure by

- accelerating interstitial fluid movement in the brain in hypertensive rats and humans. The 52nd Naito Conference. 札幌. 2024年10月
13. 澤田泰宏. Developing mechanical intervention as a novel strategy to maintain organismal homeostasis based on uncovering the molecular mechanism behind the benefits of exercise. Joint Conference of The 22nd Annual Meeting of Asian and Oceanian Myology Center and The 10th Annual Meeting of Japan Muscle Society. 奈良. 2024年9月
14. 澤田泰宏. 運動による生体恒常性維持効果の分子基盤 — 運動ってなんだ? 第78回日本体力医学会大会. 佐賀. 2024年9月
15. 澤田泰宏. Developing a highly versatile therapeutic and preventative intervention for chronic diseases based on deciphering the molecular mechanisms underlying the “almightiness” of physical exercise. The 20th Bone Biology Forum. 東京. 2024年8月
16. 澤田泰宏. Developing highly versatile novel therapeutic/preventative strategies for chronic diseases based on uncovering the molecular mechanisms behind the antihypertensive effects of physical exercise. 36th Cardiovascular Metabolism and Aging Conference. 東京. 2024年7月
17. 澤田泰宏. メカニカルストレスによる脳機能維持のメカニズム. 日本補綴歯科学会第133回学術集会. 千葉. 2024年7月
18. 澤田泰宏. 高血圧改善をもたらす運動の本質としてのメカニカルストレス. 第42回日本骨代謝学会. 那覇. 2024年6月